

道中日記に見る津の記述

年代	記述内容	出典
明和4 (1767)	一、津江 二里半 御城下藤堂和泉守様三十五万石 町の長一里半余 此町ニ ベニ地たばこ入名物 一丁々々木戸有 、賑結構成町なり、入口橋、町中も橋、左ハ海なり	『上方道中記』 (『近世の磐梯町』、福島県磐梯町)
天明3 (1783)	一、津へ 式里八丁 此所藤堂和泉守様三十式万三千石御城下也、此所 たはこ入 出所也、是より左ノ方ニ鳥大神宮道有り	『安倍五郎兵衛天明三年伊勢詣道中記』 (秋田県横手市増田町文化財協会)
天明6 (1786)	一、津江 式り 御城主藤遠和泉守様 三拾五万石 町ノ長サ七拾五丁 多葉粉入 名代也 四天王寺 と言寺有 八景有	川瀬雅男『西国道中記』 (私家版、福島県白河市)
天明6 (1786)	津之城主藤堂和泉守知行三拾式万三千九百五十石也、伊賀上野茂御取被成候、町長七十町有り、 さらさ紙たばこ入 名也	大馬金蔵『伊勢参宮道中記』 (いわき地域学会図書)
天明8 (1788)	津に至る。藤堂侯三十万石の城下、 富商軒を連らね繁昌の地なり 。…津の町を見るに、 町よこたてにありて 、往来は入口より出口まで二里程あり。能渡海也。	「江漢西遊日記 二」 (『日本庶民生活史料集成第二巻』)
寛政2 (1790)	(津) 町ノ内 恵日山観音寺 是ハ大神宮御本地 開帳百文也 木庵宅庵かくあり ひやうたん屋ト申旅籠屋 よし 是へ参候処 甚相込故 是より差図ニ而加美屋 百三十文宛	川瀬雅男『西国道中記』 (私家版、福島県白河市)
文化3 (1806)	一、津へ 式里 此所城下 町之内七十式丁あり、なかき町なり	「道中記」 (福島県歴史資料館蔵、五大院文書)
文化4 (1807)	津 雲つへ二り。町吉。遠々和泉様御陣屋有。本城は伊賀の上野也。常清橋長三十五間ばかり、岩戸橋長三十式間、町中に からのみだ 東向、又 観音堂 南向、しやれ松あり。寺中ひろし。寺領百石、真言宗、 大宝院 。町中に四天王寺、此はぜん宗也。寺間口は百七十間、普請吉、正徳大師の御建立地なりとかや。夫より町出口に又橋あり、渡りて右へ行、町長さ七十五丁と言也	「京都大坂初瀬高野奈良吉野伊勢道中記」 (『土浦市史資料 第一集』、茨城県土浦市)
文化9 (1812)	(津) 茶や共至極強勢に被引込扱々入り申し候、御本城ハ伊賀の上野ニ御座候よし、昼食ニ なめしてんかく名物をたべ申候 、誠に賑々舗処ニ御座候	『西国順礼道中記』 (大子町史料、茨城県大子町)
文化9 (1812)	江戸橋 越る、右京還道、左伊勢道有…津町、右ニ藤堂和泉守様御城有、高三拾五万石、町内ニ 日本橋同様之橋 有	「伊勢代々道中日記帳」 (埼玉県立文書館・藤城家文書)
文化9 (1812)	一、伊勢津 二里八丁 但シ此町二り有 此所 入口に土橋 有、町中に板橋有、是ハ 唐金のぎぼし 成、但シ三拾五万石の御城下、藤堂和泉守なり	「西国道中記」 (福島県立図書館蔵)
文政6 (1823)	津へ 二り 此入口川有、 土橋也 、夫ヨリ少し行瑠璃殿五間四面瓦ぶき、前に太子堂有、夫ヨリ本町へ行、御城主藤堂和泉守御知行三十二万三千九百五十石也、行テ町中二王門喫水有、堂二間ニ五間四面観世音也、空殿結構也、左 国府ノ阿弥陀如来 御門毘沙門天也、其外諸堂多シ、太神宮御本地仏也、真言宗 恵日山観音寺 、此所八日晚泊、木銭五十文 中 紙屋平右衛門	「伊勢道中記」 (福島県歴史資料館、庄司吉之助家文書)
文政12 (1829)	津ノ宿、東堂和泉守様御城下ニて、長サ七十式丁有之宿。 橋渡り右ハ往還京道也 。左り伊勢道ニて、是より出雲宿へ式り行、桜屋ニて昼食致し、出雲川舟渡し。	「道中日記帳」 (古文書を探る会『江戸時代の庶民の旅』、東京都八王子市郷土資料館内)
文政13 (1830)	夫より津の宿ニ懸り、入口 江戸橋 、中当所橋(塔世橋)、はつれ岩田橋、津の町七拾式町有、同所 閻魔前平次由来書 出ル	「伊勢道中日記」 (遠江国、個人蔵)

年代	記述内容	出典
天保元 (1830)	一、津 耆里 津橋ニ而海見ヘル、 阿こぎか浦 と云、 阿弥陀堂 前小さらや、ひやうたんや 藤堂和泉守様御城 阿弥陀堂本堂ノ右ノ方也	「伊勢道中案内留」 (埼玉県立文書館、野中家文書)
天保5 (1834)	一、津へ 式り半 此所藤堂和泉守様御城下三拾貳万三千石、町中ニ薬師堂、又町中北ニ 観世音 、弘法大師ノ御作也、左ニ 国府の弥陀如来 、是ハ天照大神宮様ノ御自作仏也、御誓願ニハ我ヲおかまハ国府之ミだヲ拝かめトノ御誓願也、開帳ハ何人ニても百文ツゞ也、此所ニ あこぎか浦 と云也	「参宮上方道中日記」 (陸奥国仙台、個人蔵)
天保10 (1839)	(津) 城下 入口ニ板橋有、町中ニ橋有 安濃津 岩田橋ト云 、 唐金きぼう珠也 、外町家よろしき町家也	渡辺鉦良「天保十年伊勢参りの記録」
天保12 (1841)	上野ヨリ津イニり半、町内七十二丁ノ城下、藤堂和泉守三十二万三千九百五十石ナリ、町中頃ニ殺生禁タン川アリ、橋下ニ魚多シ、 イセワ津テモツ 、 津ワイセテモツ 、右ノ通り 津ヲ立下ノ入口チニ アコキ平治ノ由来堂 アリ、是ヨリ東アコキノウラ	「伊勢道中連々草」 (群馬県立文書館、伊勢崎市立図書館文書)
弘化2 (1845)	津ノ町ト言所、此所城下ニ而よろしき所、尤藤堂和泉守様三十五万石、右宿入口ニ武州岩槻木綿屋中間中より 常夜灯 有、右所出口ニ而柏屋惣助ト言内ニ而昼食相遣へ申候、尤此宿長さ七十五町程有	「伊勢参宮日記帳」 (『岩井市史 資料 近世編Ⅱ』、茨城県岩井市)
弘化5 (1848)	一、津江 耆り半 遠藤和泉守様三十貳万三千九百五拾石ノ御城下也、町中ニ 国府ノ阿弥陀如来像 、天照大神宮様御本堂十四間四面、梵字天井、玉の空殿御普請結構也、仁王門有、夫より 町中ニ大板橋有 、 唐金の銀星 、爰より 御城構 見ゆる、尤あこぎ浦江通ル処也、町長キ事式里有、出口ニも橋有、夫より田中道通相ノ宿、茶屋等も有	「伊勢道中記」 (『桃生町史 第四卷 諸史編』、宮城県桃生町)
弘化5 (1848)	津城下 鍋屋久左衛門屋敷 三百貳拾貳文 飲食代 当宿家作窓入多し 、城下ゆへ桑名同様 宿並は却てよろし 、 関東風に見ゆ 、くもつ川端迄四百文ニて駕籠雇、爰を大門と云、直ニ□せばし土橋海道ニも此類なし、長二十七間、此はしより一町半行向に 御城 見ゆる、参宮道左へ行、 宿屋は観音前瓢たんや よろし、此辺 家作屋根大伝馬町木綿店ニひとし 、御城西の方橋岩田ばし	『江戸時代の旅日記』 (千葉県茂原市立図書館)
嘉永3 (1850)	津の御城下、よき処なり。夫より、ぼらばなにて 茶漬 を食す。大黒屋藤兵衛、名茶屋なり。此処より雲出まで式里。然し乍ら此間近し。雲津川あり。宿をさし挟むなり。北雲津迄は半道ばかりなり。駕馬等取る節は南雲津まで何程と、きめべきなり。	金井好道『伊勢金比羅参宮日記』 (群馬県新田町、私家版)
嘉永5 (1852)	一、津ノ町江十八町 此町長サ七十二町なり、よき所なり、高三十二万三千九百石藤堂和泉守御城下也 此間雁八幡宮有、次ニ岩田川三十六間 板橋 あり、 からかねぎぼうし附 、爰ニ さどいつぼやきあり 、岩田町いんま前、みなとや、昼食百文	「道中日記」 (『所沢市史 近世史料Ⅱ』)
嘉永5 (1852)	白子津は城下の合い十七町まわり、一心殿と言う寺なり。門徒也。津御城下中程、 かねあみたさん へ参詣、是は大神宮様の御本寺仏と言う。津御城下 えんま堂前大黒屋 昼めし…津御城下町よろし、入口より出口迄七十二丁、藤堂和泉守様高三十二万三千九百五十石	「伊勢太々金毘羅道中記」 (『小川町史 上巻』、埼玉県小川町)
安政元 (1854)	津の町辺破れ家多し、津の町ゑんま堂の辺殊に大破也、爰ハ阿漕が浦平次の古跡なりければ、伊勢の海 阿漕か浦にゆるなみも 度重なれハ破られにけり 古語に地しんをなみといふなり	「地震道中記」 (『旭市史 第二巻』、千葉県旭市)
慶応3 (1867)	津 くもづへ 二り半 一、六匁也 泊 若狭や六兵衛 同 九日 右之方ニ藤堂伊豆見守 御城 有	「参宮道中記」 (『神奈川県史料集成 第五号』)

年代	記述内容	出典
明治7 (1874)	津江式り 藤堂和泉守御城下あり。此所伊勢大神宮御本地也。京都本願寺弥陀如来うつし 勢州第一観音 と言、参詣。御朱印百五十石。藤堂和泉家中、稻住金吾泊り	「伊勢参宮道中記」 (『研究紀要』8、戸田市立郷土博物館)
明治13 (1880)	津ノ宿 入口ニ 江戸ハシ 有、江戸やト云、人力車の立場有、是y出抜ケ迄ハ二里モ有ト云、 至極繁昌ノ所 也、松健、那須治、坂半、鈴木、油作、沢力、六名、四日市ヨリ津迄馬車ニ乗り、先へ行ク、大こくや宿ノツモリニ候処、至而不テイサイノ一新講社ニ而、大こくやを後連着後ニ立、五十丁行ク、香良須へ行ク、 津ノ御城 ハ元ノママ也、尤外クルワハ堀モナシ、本丸ハ小城也、家屋敷ハ少シ	「道中日誌」 (『表郷村郷土資料集 一四集』、福島県表郷村教育委員会)
年未詳	津町 亀屋中飯 上のより式り半 此処藤堂和泉守様御城下也、町並凡式里も有之、中程ニ 恵日山観音寺 あり、地中ニ観音堂あり、御能之御祭有、御城より奥様若殿様御見物に被為入ル、御能相済、夫より竹ねり棒ねりと申御祭り有之、町内至而大祭りなり、又少し行 ランカン有之、板橋あり 、凡四拾間斗有之、又少行 エンマ堂 あり、此寺ノ地中ニ 阿漕平次ノ古跡 あり、寺ノ裏ニ 阿漕塚 あり	「道の記」 (栃木県立文書館蔵、田村文書)